

【入選】 イラクの子供から学んだこと

栃木市立栃木南中学校 三年 森戸 千浩

「川の絵を描きなさい。」そう言われたら、あなたは何色で色を塗るだろうか。おそらく水色や白などの明るい、澄んだ色であろう。私ももちろんそのような色で塗る。それは、世界共通のことであると私は思っていた。しかし、私の考えは、美術館で出会った一枚の絵によって覆されたのだ。

それは、今年の夏。私は友人と世界の子供達がテーマの展覧会を見に行った。それぞれの絵が日本にはない文化をとらえていて素晴らしいものだった。しかし、ある一枚の絵の前で私の足は動かなくなってしまった。その絵はイラクの子供が川で笑顔で遊んでいるもの。日本でもよくある風景だが、明らかに様子が違っていた。子供達が楽しそうに遊んでいる川の色は、赤みがかかった茶色であったのだ。私ははじめ、その絵が川で遊んでいる子供の絵とは全く考えもしなかった。しかし、タイトルに「川遊び」と書いてあったのを見て、ようやくわかったのだ。わかったと同時に私は胸が締めつけられる思いをした。いつでもどこでも、澄んだ水が飲めると思っていた自分に腹が立った。

そもそも水とは何だろう。当たり前すぎて考えなかったことを私は考えてみることにした。簡単なようでなかなかわからない答え。しかし、私達生命体が成長するのに必要なものということは前から知っていたが、今改めて確認した。命あるもの全てに水は必要なのだ。しかし、世界には水を求めて死んでいく人がいるのが現状であり、逆に日本などの先進国はいつでも澄んだ水を使えるのも現状だ。同じ地球という惑星に住んでいるのに、こんな違いがあってはならないと私は強く思った。

とはいえ、私達は水の貴重さを忘れていたような気がする。私はいつも母に

「水がもったいない。止めなさい。」

と言われ、心の中で反抗することが多々あった。いつでも水が使えるのにどうしてこんなにうるさく言われなくてはならないのか、不思議にも思った。しかし、あの絵を

見てから私はよく考える。もし、蛇口をひねった時、あの茶色い水が出てきたらどうしよう？一滴も水が出てこなかったらどうなるの？と。私は今までの水の使い方に対して反省した。朝起きてから就寝までの全てにおいて私のそばにある水。しかし、蛇口をひねれば水がでること、それは奇跡なのだ。水は大切にしなければと思い、私は台所の水の蛇口を無意識のうちにキュッとしめていた。あの絵を描いた子供の為に、そして世界中の水を求めている人の為に。

しかし、私一人が努力したからといって世界に澄んだ水を届けることは、きっと不可能に近いのだろう。なんともいえない怒りがこみ上げてきた。どうしたらいいのか、母に尋ねると、母から返ってきた答えは意外にも簡単なものだった。

「その気持ち、みんなに伝えてみたら？」私ははっとした。今まで一緒に歯みがきをしている友達が水を出しっぱなしでも何も言わなかった。友達が水をしっかり止めていなくても注意しなかった。これからは少しでももったいないと思ったら、それを注意していこうと思う。

「便利な世の中になったなあ。」祖父は最近、よくこう嘆く。それと同時に限りある資源を無限のものだと勘違いすることが多くなった。そんな今だからこそ、私は今まで以上に水を大切にしていかなければならないと思う。私はイラクの子供から、水の大切さを学んだ。まだ、中学生である私がイラクの子供の為にできることは少ないかもしれないが、できることからやってみようと思う。そして、私が大人になったら、未来はこうあってほしいと願う。そう、イラクの子供、世界中の人々が澄んだ水を口にすることができる未来を一。